



Philosophy Thought and Culture

哲学・思想文化学専修

哲学は諸学の基礎の基礎に位置する学問です。例えば、何かが「存在する」とはどういうことか。「意味する」とはどういうことか。意見が違うのに、違うということだけは一緒に確認できてしまうのはなぜか。根拠付けができたためしがないのに、なぜ現実には崩壊せず歴史は終わらないのか。そして、こんなことを問っているのは、心なのか脳なのか何なのか。哲学はこうした問題に取り組んできました。あまりに基礎的なので、現在でもこれに代わる分野は他にありません。

私たちの専修では、西洋の近世から現代までの哲学思想の研究を行っています。教員は全員古典と現代哲学思想の両方に通じ、専門領域をあわせるとドイツ系、フランス系、英米系のすべてをカバーしています。私たちは「なぜ」という疑問をとことん考えるための手ほどきと時間を提供し、助けます。

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy/>

教員

須藤訓任 教授	すとう・のりひで
舟場保之 教授	ふなば・やすゆき
望月太郎 教授	もちづき・たろう
中村征樹 准教授	なかむら・まさき
嘉目道人 准教授	よしめ・みちひと

何を学んでいるの？

哲学の基礎A

言語哲学、認識論、心の哲学、社会哲学などの哲学的問題を取りあげ、解説の後、より深く広い視野から考える力を身につけるため、各自で問いに答えを与える訓練を重ね、心と頭の柔軟体操を行います。

哲学の基礎B

ひとりの哲学者が書いた論文を手がかりにして、ギリシア哲学—中世哲学—近代哲学—現代哲学と、どのような問題がどのように引き継がれ、どのような回答が与えられてきたのかを、振り返りながら自分自身で考えることの重要性を学びます。

どんな授業があるの？

【講義題目】

西洋哲学通史（クザヌスから現代まで）

現代哲学史概説

【演習題目】

ウィトゲンシュタイン『哲学探究』を読む

ニーチェの『ツァラトゥストラ』

教員が選ぶ印象に残った卒業論文

リベラリズムにおける寛容への批判

J. ロールズに代表される現代のリベラリズムが、政治的に解決されるべき差異を私的領域における本質的な差異として捉え、その対処を寛容に委ねている点を批判的に考察するとともに、こうした本質主義を脱構築する公的領域の形成に向けた提言が行われる、非常に優れた論文。（選：舟場保之 教授）

【卒業論文題目】

心の哲学と現象学における「共同」概念

諸国家連合と世界市民体制

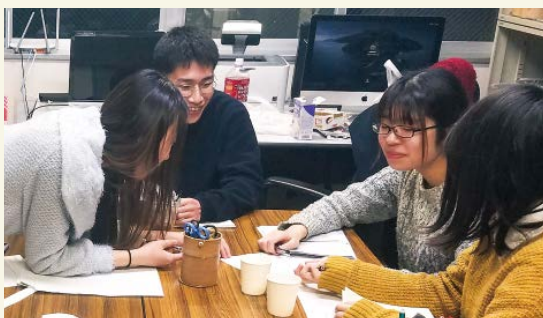
哲学と社会の接点—デカルトの場合—

ドゥルーズ『意味の論理学』における

ストア派由来の道徳について

脳死議論に関する考察—日米比較を通して—

ウォルトンにおけるフィクションの中の「真理」



自分の頭で深く考えたい人はぜひ来てください。

なぜ哲学・思想文化学専修を選びましたか？

T.A 哲学というと、一つ一つの言葉を大事にして、深く読み込んでいくという感じがしています。そういう意味で一番細かい議論をする学問だと思います。より深いところ、理論のようなところをしっかりと勉強したいと思い、哲学・思想文化学専修を選びました。

それは例えば何についての理論ですか？

T.A 例えば、「自由」についてです。そもそも自由なんてものがあるのか。あるとしたらそれはどういうものか。ないとしたら、どうして私たちは自由があるような気がしてしまうのか、といったことです。「自由」のように、普段当たり前に使っている基礎的な言葉の意味にまで遡って考えることが哲学なのだと思います。

「自由」といった哲学の問題をどのように研究していますか？

T.A 今は哲学者の書いた本を読んで、その哲学者について研究しています。原書を読むために語学を勉強したり、他の授業もあるので、今は自分の問題としたいテーマを直接に扱うため

の準備をしているという感じです。

A.N 研究室にはデカルト、スピノザ、カントなど特定の哲学者について研究している人が多いですね。「自由」の問題にしても、「デカルトにおける自由の概念」みたいな。

やはり、本はたくさん読まないといけないのですか？

A.N そうですね……（笑）。

T.A 経験から言うと、いきなり何でもは書けないと思います。本を読んできて言葉の意味が分かって、その言葉が使えるようになって、そこから使える言葉を使って文章を書くのでなければ、ちゃんとした文章は書けない。そのためにも、哲学の古典や参考文献を丹念に読むことは必要なことだと思います。

A.N 確かに、例えば「自由」「時間」といったテーマで書くためには、何かを読んでそれを下敷きにして考えていかなないと…それが無いと思いつただけの文章ができません（笑）。

研究室の雰囲気を見せてください。

T.A 真面目な人が多いような気がします。実際に、専修イメージランキング（『文学部紹介2013-2014』）では、

「真面目な人が多そうな専修」という項目でぶっちぎりの1位でした。

A.N それは、あくまでも「多そう」だから（笑）。

T.A 一匹オオカミは多いかもしれませんが、ただ、大学院生も多く在籍していて、語学や研究のことでいろいろ気軽に教えてもらうことができますし、また関心の近い人たちが集まって読書会も多く開かれていたりするので、研究するには良い環境だと思います。

最後に、これから入ってくる高校生にメッセージをお願いします。

T.A ドイツ語やフランス語で文献を読む授業がありますし、哲学の抽象的で理解しづらい理論が急に出てきて大変かもしれませんが、それだけ鍛えられますし、哲学を専門的に勉強したい人にも…今はそれほど関心がない人にも…やりがいのある専修だと思います。

A.N 哲学的なテーマについて誰かと議論したい人、自分の頭で深く考えたい人はぜひ哲学・思想文化学専修に来てください。そして、自分の頭で考えるために、一緒に哲学の本を読み、議論をしましょう。

研究室に関わる書籍をご紹介します。



『超越論的語用論の再検討』

嘉目道人：著／大阪大学出版会／2017

アーベルが提唱した超越論的語用論は、現代ドイツ哲学の「言語論的転回」を主導した。しかしその主眼である「究極的根拠づけ」という哲学的課題には、多くの批判が寄せられてきた。本書は論敵ハーバーマースからアーベルに向けられた批判に対して、フィヒテとの関連から応答を試みる。超越論的語用論の哲学史的な位置づけの修正、直面している問題の解決、現代的意義の解明に取り組んだ著作。



『人権への権利』

舟場保之：監訳／大阪大学出版会／2015

経済的グローバル化の中で改めて希求されている人権概念を、様々な角度から哲学的に検討する諸論考の翻訳書。人権への権利はありうるのか。「人権侵害」を理由とする「人道的介入」は正当化されるのか。それぞれの論考に解題をつけて、問題圏へと読者を巻き込みます。



『メタフュシカ』

『Philosophia OSAKA』

哲学・思想文化学専修では、倫理学専修とともに『メタフュシカ』を年1回発行しています。教員だけでなく、大学院生が研究成果を発表する貴重な場となっています。また、海外に向けて研究成果を発信するために、欧文雑誌『Philosophia OSAKA』を発行しています。

書籍紹介

